

●「親の心、子知らず」という言葉は室町時代の「義経記」に記された言葉です。また吉田松陰は「親思うところにまさる親心けふの音づれ何ときくらむ」という辞世の句を「安政の大獄」の中で残しました。「私が親のことを思う以上に親は私のことを思ってくれている。今日私が処刑されるという知らせを親はどのように思っているだろうか」と歌っており、いつの時代も政治的な争いの中で、人の命が簡単に奪われ、そこに常に、人の悲しみや、親の子を思う「痛み」があることを知らされます。

●本日の聖書は「放蕩息子の譬え話」です。ある人に二人の息子がいて、弟が父親の生前に財産を分けてもらい、放蕩のかぎりを尽くして落ちぶれ、そこで悔い改めて父の元へと戻ったところ、父はその息子を温かく迎え入れ、宴会を開いたという話です。この譬え話は後半部分も合わせて読むことに意味があります。後半には、放蕩息子を喜んで迎えた父親に怒る兄とそれをたしなめる父親について語られています。

イエス様がこの譬え話をされたのは、ファリサイ派と律法学者たちがイエス様に向かって「罪人と共に食事をしている！」と不平を言ったのがきっかけでした。つまり、弟とは罪人や異邦人と呼ばれる人々を指し、一方兄は、昔から神の戒めを守っているが、罪人を裁き、一緒に食事を取ろうとしなかった宗教家たちを指しているのです。

●この話のポイントは弟も兄も共に「親の心を理解しなかった」という点です。そして、イエス様がこの譬え話で本当に伝えたかったのは、その両者をどちらも決して見捨てることのできない「神の親心」なのです。そしてイエス様の十字架は、皆が互いに赦しあって生きるようにと、神ご自身が人となり命を捧げてくださった「神の親心」の象徴なのです。

●本当は仲良くすべき、兄弟、家族、民族の間で血を流し合ってきた歴史を思う時に、果たして人類は神さまの心を深く知った時があったのだろうか、と問われる思いがいたします。ウクライナとロシアの戦争も開戦から一年半が経ちます。先日、子どもの死を嘆く親の映像を見た時に、「なぜですか、神様？」と心を痛め、涙を流し祈っていましたが、その時、ふと神様が「私も悲しいのだよ」と語りかけられた思いがしました。

どこまでも優しく、どこまでも平和を求めて生き、全ての人のために命を捧げてくださったイエス様と、その十字架に込められた「神様の親心」を私たちは決して忘れてはいけません。聖書は私たちに膨大な聖書の言葉を持ってそのことを教えようとしているのです。

